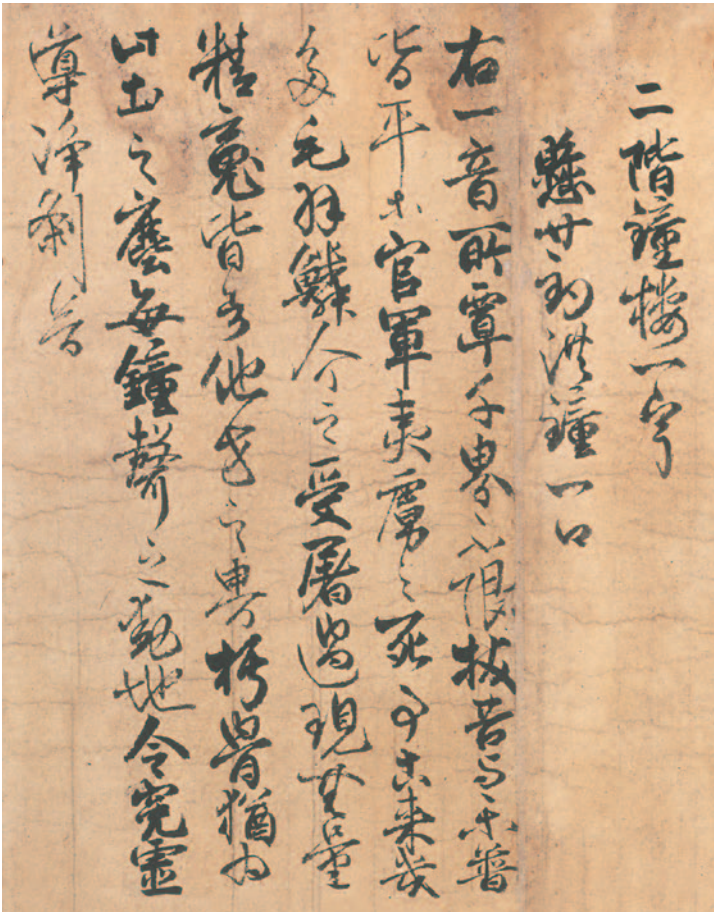
関山

かんざん

第16号



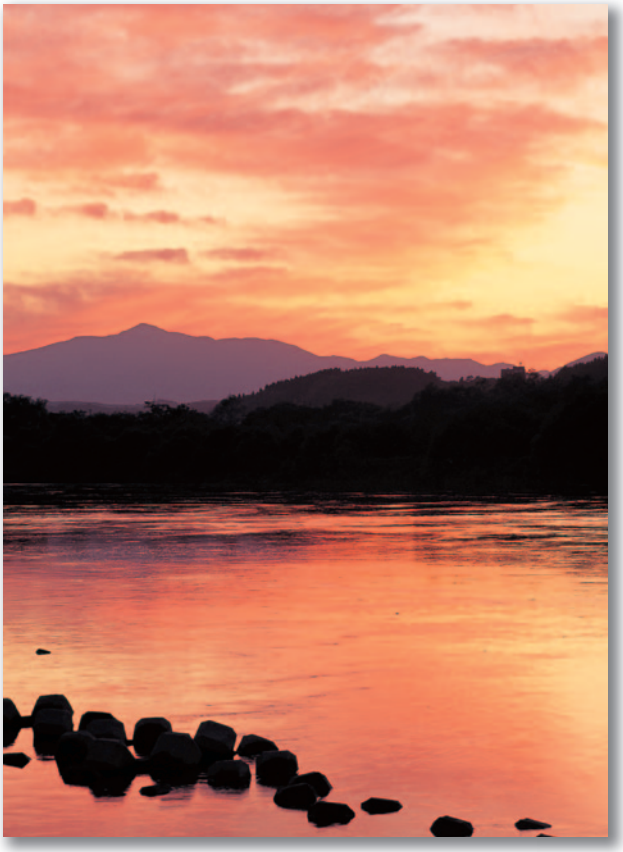
寺報　中尊寺

目次

寺報　グラビア　48
霊山浄土　貫首　山田　俊和　6
千田前貫首を偲んで　菅原　信海　9
今春聴（東光）師との仏縁　瀬戸内寂聴　15
『維摩経』と「浄土建設」
—梵字テキストに照らして　西野　翠　18
五台山・中国への旅
—中尊寺檀徒総代・世話人研修旅行　千葉　和夫　23
「爾時の人」　菅原　光中　28
風信・語録　30
福聚教会・中尊寺支部便り　佐々木禎子　33
文化財だより　34
新刊紹介　36
関山句嚢・関山歌籠　38
陸奥教区宗務所報　45
御神事能番組　47
執務日誌抄　55
御奉納者　御芳名　55
浄財御奉納者　御芳名　56
浄財募金
赤堂稲荷鳥居建立寄進　御芳名
不動尊篤信御奉納者　御芳名

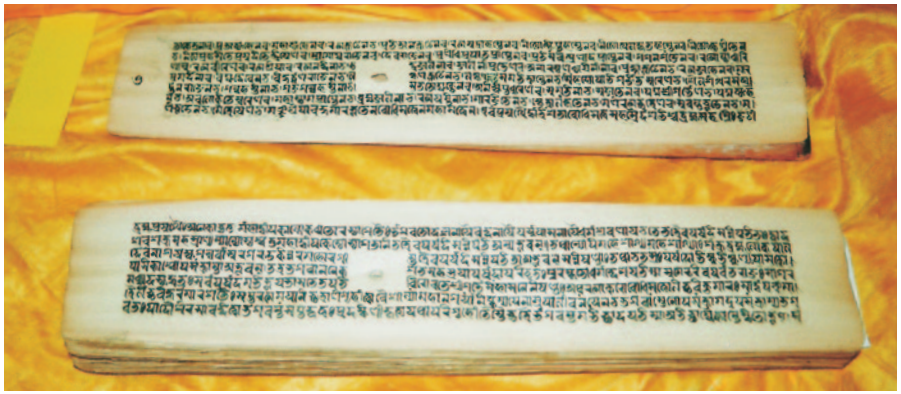
〈表紙〉　中尊寺建立供養願文（部分）

二階の鐘楼一宇
二十鈞の洪鐘一口を懸く。
右、一音の覃ぶ所千界を限らず。抜苦与楽、普く皆平等なり。官軍夷虜の死事、古来幾多なり。毛羽鱗介の屠を受くるもの、過現無量なり。精魂は皆他方の界に去り、朽骨は猶此土の塵と為る。鐘声の地を動かす毎に、冤霊をして浄刹に導かしめん。



北 上 川

寺報グラビア



1999年7月、大正大学綜合佛教研究所により発見された『維摩経』サンスクリット写本
（本文18ページ参照）

紺紙金銀字交書一切経のうち「廣弘明集第十九」還蔵

経蔵、旧覆堂保存修理（平成19年3月～21年11月）

前貫首
故 千田孝信大和尚を
偲んで

藤原四代公追善法要

ご退山の朝、地元民に見送られて日光へ

カンボジア　アンコール・トムにて

中国五台山登拝

本坊にて、地域の子供達の前で紙芝居『きよひらくん』を上演

〈恒例　花まつり〉よもぎもち作り・ぬり絵に取り組む子供達

八重樫貞子先生をお招きしての「茶道稽古」（中尊寺職員研修）

狂言『口真似』を清々しく演じる子供達

御神事能『田村』

霊山浄土

貫首　山田俊和

法華経に「お釈迦さまはインドの国マガタ国の北東の地にある霊鷲山に常にいらっしゃって滅することなく法を説かれている」とあります。霊鷲山は鷲の形をした山で略して霊山といい、時空を超えてお釈迦さまの説法を直接聞くことができるところです。

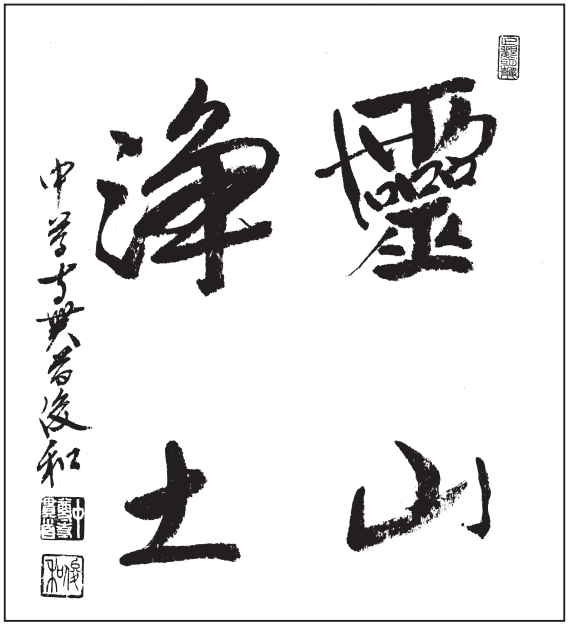
浄土は無量寿経の清浄国土を二字に詰めた語で、苦しみや悲しみなどない仏さまのお住いになられる清らかなところです。浄土には来世浄土（死後に往く来世にたてられた浄土）、浄仏国土（菩薩行により現世が即浄土に成る浄土）、常寂光土（信仰を通してひたることのできるこの世に常に在る浄土）の三が説かれています。霊山浄土は来世の浄土として説かれていますが、法華経に説かれているところをみますと、浄仏国土であり常寂光土であるともいえます。

お釈迦さま滅後およそ千年も経た頃、中国に天台宗の高祖天台智者大師智顗が現われ、大蘇山に慧思禅師を訪ねて教えを請うた時、禅師は智顗に「昔は霊山に共に列なってお釈迦さまから法華経を聴いた」と不思議な因縁を語り、法華経の妙旨を授けたと言われています。

さて慈覚大師円仁さまは嘉祥三年（八五〇）東北巡錫の砌、関山に弘台寿院を開基し釈迦如来像を安置して中尊寺の基を築かれました。藤原清衡公は長治二年（一一〇五）中尊寺創建に当って、先ず多宝塔を建立し釈迦如来像を安置されました。そして天治三年（一一二六）中尊寺落慶式に読み上げられた中尊寺建立供養願文の冒頭には「安置し奉る丈六皆金色釈迦三尊像各一体」とあります。このように中尊寺は、お釈迦さまのお説きになられた法華経の教えを学び、修行し、広めることにより、奥州に平和と幸福をもたらす根本道場として創建されたのです。

中尊寺は創建以来今日に至るまでに、諸尊仏や堂塔の多くを焼失しましたが、幸いにも、金色堂をはじめ貴重な聖教等が伝承されて参りました。明治四十二年に現本堂建立に際しご本尊に阿弥陀如来像を奉安してまいりましたが、中尊寺創建の精神をより明確に後世に伝えるために、今般本堂ご本尊として、新たに丈六釈迦如来像を造立致すことになりました。このことにより中尊寺本堂は正に霊山浄土として、皆が等しく教えを聞き、苦しみを離れ、安らぎを得る場となることを念願致して居ります。

今日、世界中が政治、経済の混乱の中にあります。紛争、環境（温暖化）、自然災害、食料、流行病、宗教等々身の回りは危機に満ちています。私達は一度立ち止り、人としての生き方を考え直さなければなりません。心静かに仏の教えを聞き、自然を尊び、他人の協力に感謝して生きる共生の心を持たねばなりません。即ち、浄仏国土を築く、霊山浄土に住し、極楽浄土に往生することを念願して、常寂光土を体得できるよう信仰を深めたいものです。



千田前貫首を偲んで

菅原信海

「元気かい」との電話での問いかけに、「元気だよ。安心してくれ」といつもと変わらぬ声が返ってきた。

入退院を繰り返していたとはとても思えない、張りのある爽やかな声であった。それは、四月に入ったばかりの二日目のことだった。二人の年齢を考えると、いつなにがあっても、おかしくない歳だから、お互いに気をつけようよと、電話を切った。よもやこれが千田前貫首と交わした、最後の会話になろうとは、思いもよらなかった。そのとき日光にいた私は、翌三日には、比叡山で四日から始まる御修法（みしほ）に参勤のため、京都に向っていた。御修法に参勤して、皇室法要のため下山し、十一日に千田前貫首遷化の報に接した。僅か十日前に、声を聞いたばかりだったから、夢ではないかと、耳を疑った。聞けば、大動脈瘤破裂とのこと。動脈瘤のあることを知っての覚悟の死だったという。前貫首は天性明朗で精神高邁な宗教者であった。その前貫首を失ったことは、中尊寺にとっても、また宗門にとっても痛恨の極みである。

千田前貫首と私は、共に日光の寺に生まれ育った。彼は大正十五年一月の生まれで、私は前年十月生まれなので、小中学校を通じて同じ学舎に通った、竹馬の友である。二人が寺の生まれだったからか、学校側も気遣ったようで、小学校の日光第一小学校は勿論のこと栃木県立今市中学でも、同じクラスではなかった、と記憶している。このように学校では同学年であり、しかも二人は親戚でもあった。だから前貫首は、私にとっては幼馴染の千田新（あらた）（幼名）くんなのである。親戚の関係とは、私の曽祖父実玄師と千田くんの祖父丹宮氏とが兄弟で、丹宮氏は養子に入って千田家を継いでいる。つまり、われわれは、一代ずれた再従兄弟なのである。

千田くんが、小中学校を通して、優秀であったことはいうまでもない。いつもトップを走っていて、われわれの牽引役であった。その頃の中学校(旧制)は五年制であったが、千田くんは、四年修了で旧制浦和高校文科乙類に合格した。難関で有名な高校に、しかも四年修了で入れたことは、いかに優れていたかを立証するものだ。高校卒業後、京都帝大へ進学した。西田幾多郎を創始者とする京都学派を継承する田辺元・高坂正顕・西谷啓治たち碩学が、健在だった京大に憧れてのことである。文学部哲学科では、特に選んで西洋哲学を専攻している。仏教を西洋哲学の視点から、探求したかったからである。

その頃、日本は米英両国を相手にしたアジア太平洋戦争末期であった。日中戦争に引き続き、中学校四年の十二月八日に始まったこの戦争は、われわれ若き学徒を、戦場に駆り出させた。千田くんも例外ではなく兵役に服し、幸い外地に赴くことなく、千葉県九十九里浜で、米軍の上陸を阻止すべく、戦車に向って爆薬を投げ込むという、なんとも果かない訓練に、日夜を送っていたことを聞かされた。この戦争で、われわれの青春は苦しみのみ多く、無益に過ぎ去ったのである。終戦後、ようやく落着きをとりもどして、千田くんは、日光に戻り、昭和十九年に亡くなった師僧孝海師の後を継ぎ、自坊観音寺の住職になった。檀家の世話をしながら、傍ら新制日光高校の教壇に立つことになった。爾来三十三年、教員の職にあり、彼の薫陶(くんとう)を受けた生徒は数多い。

彼の著書『花咲け　みちのく　地に実れ』の中で、八千六百七十一名の生徒を教え、十人の校長先生、八人の教頭先生に仕え、同僚の教師は二百四十七名の先生方だったといっている。それが三十三年間の彼の訓育の実績であり、また影響を与えた同僚の先生方の数だったのである。一つの高校で、教えた生徒八千六百七十一人という記録は、これからのちも簡単には破られそうもない記録であろう。

千田くんの薫陶を受けた生徒は八千六百余人、いまや社会の各方面において活躍している。彼等は、頼りがいのある、存在感のある人物に育っているであろう。千田くんは、まさに「一隅を照らす」人材を、育て上げてきたのである。

日光高校での千田くんの授業は、彼の実力はもとより、豊かな学識によって裏付けられた、優れた内容であったのであろう。彼を慕う生徒の数は大変なものであった。生徒に慕われた人望のある教師であった。その人望は、教室ばかりではなく、卒業した生徒にまで及んでいた。ともかく面倒見のよい人情深い教師であった。その面倒見のよさは、卒業した後まで、続いていたのである。彼の『花咲け　みちのく　地に実れ』のなかに、彼の教え子に関するいつかの逸話が載っていて、読むものに、涙あり笑いありの感動をあたえてくれる。

教え子に対するひとことが、その子の一生を決することもあり、彼は教師冥利に尽きるといっているが、それよりも、ひとことの重さ、こわさを感ずる、と述懐(じゅつかい)している。彼のような教師でなければ、いえない言葉である。

千田くんは人を巧みに惹きつける話術に優れていた。それが生徒を惹きつける授業になったのであろうし、また檀家の人望をかちえた点でもあった。その話術は、人に語りかけるような親しみがあり、彼の人柄に惹きつけられる。

そして、彼の書もまた素晴らしい。師僧孝海師の見事な書の素質を受け継いだのであろう、彼の書も格調高い、雄渾(ゆうこん)で伸びやかな魅力溢れる字で

ある。気品のあるその書が残され、多くの人に影響を与えてくれることを望んでいる。

彼の人望が、戦争で荒れた寺を復興し、檀家を教化するなど、住職としての当然の働きをこなしていた。観音寺の山門、梵鐘、鐘楼の再建、本堂、薬師堂、千手観音堂の屋根葺替、新庫裡新築などである。また宗内では、栃木教区日光部主事、栃木教区布教師会会長を務めている。しかも、更に地域の発展にも寄与するところ多大であった。日光保護区保護司会会長、日光市文化協会会長の重責を果たすなど、地域の社会的文化的活性化に、欠かすことのできない人材であった。平成二年には、厚生保護の功労によって、藍綬褒章を受章している。

中尊寺の貫首に推薦されたとき、彼から相談をうけた。私は喜んで賛同し、祖先の地に錦を飾って欲しいと、答えたことを昨日のように覚えている。祖先の地とは、中尊寺に至近の奥州市江刺区藤里が、観音寺先々代菅原実玄師と祖父丹宮氏の出身地であることによる。そこに所縁の寺勝軍寺があるからである。中尊寺中興二十七世として晋山し、十三年の在任期間中、先祖の寺である勝軍寺にもたびたび出かけて、面倒見の良さをここでも発揮していた。勝軍寺の檀家の人望を集めていて、寺に来ることを、皆が心待ちにしていたことを思い出す。

中尊寺は奥州切っての名刹で、慈覚大師円仁の開山といわれているが、平安末、藤原清衡公が戦乱で斃（たお）れた兵士の霊を、敵味方の区別なく供養するために発願して、堂塔伽藍を整備した。やがて藤原三代を祀る金色堂を中心とする寺の全容が整ってきたのである。江戸時代、この地を訪ねた芭蕉も、名句を残している。その歴史ある天台の名刹中尊寺に晋董（しんとう）してからの千田くんは、境内の整備や寺の復興に力を尽くしている。その想い出は、その著『花咲け　みちのく　地に実れ』に述べられている一方、彼の求道者としての苦労譚も、この著書から読み取ることができる。

この中尊寺の維持と発展に尽くしたことは、いまさらいうまでもないが、彼が最後まで気にしていたのは、世界遺産登録のことで、そのために、日夜苦労を惜しまなかったことである。登録を議するユネスコの世界遺産委員会に上程されるまでいったが、「浄土思想」という仏教の来世思想が、その会議では理解されず、残念ながら登録が見送られた。その登録復活の可能性がでてきた。また希望も見えてきた。再度の挑戦では、「仏国土〈浄土〉」をテーマに、地域を構成する構成遺産を完璧にして、ユネスコの世界遺産委員会で登録が承認されることを熱望したい。中尊寺は、いうまでもなく現世における浄土世界なのだから。世界遺産登録の成功こそが、彼が熱望し努力してきた苦労に報いる途であろう。

早や十年も前のことであるが、早稲田大学元総長の小山宙丸氏とともに、中尊寺にお参りしたことがある。小山くんと私は、大学で机を並べて学んだ仲で、大学を卒業し、お互いに教壇に立つようになってからも、同僚として長い付き合いがあった。そのときは、二人とも定年で退職していたが、小山くんは白鴎大学学長の職にあって、大学の運営に携わっていた。彼の専門は西洋哲学で、特にキリスト教神学が専門、私は東洋哲学で、日本宗教思想史を専門としていたことから、千田くんと三人での昼食の席では、話題は東洋から西洋にわたる宗教思想に及んで、話が弾んだことを覚えている。小山くんは、平成十八年に亡くなった。いまはこの二人とも、この世にいない。寂しい限りである。

私が妙法院門跡に推薦されたとき、わがことのように喜んでくれたのは千田くんだった。彼は中尊寺という名刹の貫首であったから、恐らく私の将来を心配していたのであろう。共に歩んだ友人を思う心遣いには、心暖まるものがある。幸い私も妙法院に迎えられることになった。彼の友人に対する心配りには、感謝せざるをえない。

千田くんは、平成十八年九月に中尊寺を退山し

て、日光の自坊観音寺にもどった。悠々自適の毎日に戻るのか、と思っていたが、その時すでに大動脈瘤が判明していて、なおかつ肝臓癌、大動脈乖離症という難病を抱えていたという。そのようなこともあってか、日光で静養生活に入ろうとしていたようである。

一昨年二十年六月の岩手・宮城内陸地震のとき、千田くんは中尊寺のことが心配で、平泉に駆けつけた。恐らく病の身を顧みることなく、なにはさておいても中尊寺へ、という思いがあったようである。東北新幹線は、仙台以北が不通だったので、仙台まで新幹線で駆けつけ、そこから迎えの車で、中尊寺に向かったと、いう話を後日に聞いた。中尊寺の地震による被害はなかったようで、彼も安堵したことであろう。彼の中尊寺にかける思いを知らされる話である。

後嗣孝明くんが、長年勤めていた栃木県立博物館を辞して、昨年四月から住職を継ぎ、後顧の憂いは無くなった。孫孝哉くんも大学を卒業、寺にもどってきた。寺族もみな健やかに過ごしている。後顧の憂いなく、安心して、安養の浄土におもむくことができたと思う。

私も齢八十有四、余生幾ばくも無くなった。やがて、彼の後を追って、彼の岸で会えることを願っている。

心から第二十七世中尊寺貫首、散華心院大僧正孝信大和尚の仏果円成を祈る。

（すがわらしんかい　妙法院門跡門主）

今春聴（東光）師との仏縁

瀬戸内　寂聴

今東光先生は天台宗の大僧正で平泉の中尊寺の貫首を勤められ、僧侶としては最高のお立場の方であった。東光という僧侶のようなお名前は父上のつけられた戸籍名であった。

出家されてからの法名は春聴であった。

今先生はお若い時、実名で小説を書き、早くから新感覚派の作家として鬼才を認められていた。ところが二十代の終りに突然文壇から身を隠し、出家して比叡山に籠ってしまわれた。思い切った転身に人々は驚いたが、その真の理由は誰にも明かされなかった。

僧侶となった今春聴の消息は東京に何も伝わらないまま、歳月は大正から昭和へ移り、長い戦争を経て、昭和三十一年になっていた。この年の下半期の直木賞に「お吟さま」という小説が受賞し、作者は今東光だった。お吟さまは千利休の娘のことで、悲運な生涯が描かれていた。

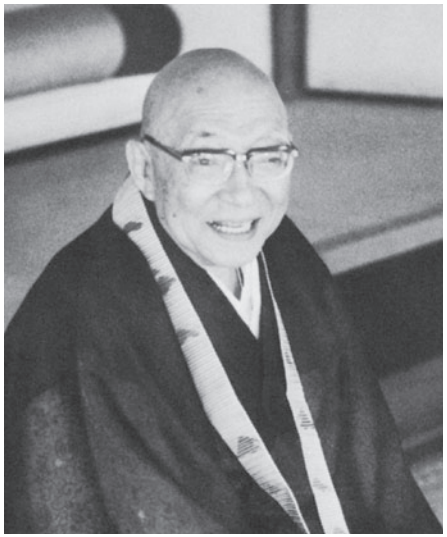
その後の今東光の文壇での一流作家としての活躍ぶりは目ざましいものであった。新聞、週刊誌、雑誌に今東光の小説は華やかに載り、マスコミの寵児になっていく。長い沈黙を解禁して何を訊かれても即座に答える東光節の名調子は、宗教家としての慈悲と重みと、本来の強烈な個性に裏打ち

関山獨雨深

されて、強い説得力があった。
そのうち参議院議員選挙に当選し、自民党の議員も兼ねられた。
この頃漸く作家として生活するようになっていた私は、文芸講演にお供する機会が多くなり、はじめて今師の人となりに触れることができた。
同行は松本清張氏で、お二人の話は、学識豊かで、あらゆる芸術に造詣深く、私は道中お二人の話を横で聞いているだけで大変な耳学問をさせていただいた。
私が五十一歳の時、出家願望に取り憑かれて、その道をさぐった時、思い切って今師に御相談に伺った。師はその場で、私の想いのすべてを見抜き、理解して下さった。
「急ぐんだね」
という一言で、私の出家得度の日をその場で決めて下さった。理由など何一つお訊きにならなかった。
寂聴という法名を下さった。ただし十一月十四日と定めて下さった式の直前、師は大腸癌の手術をされ、当日、戒師の役をしていただけなくなった。
前日、私は中尊寺へ一人出発する前、師を病院へお見舞いと、出発の御挨拶に参上した。
すっかりやつれて面変りされた師はベッドに半身を起され、
「私の代わりに、私よりもお偉い御立派な、杉谷大僧正に戒師をお願いしておいたから、何もかもおまかせして安心して行きなさい。私は明日、式の間じゅう、ここでこうして坐って、祈っててあげるよ。それから、あなたはあくまで小説家だから、式のリハーサルは一切しないように。すべてその場で、はじめて体験して、その感動を体と心に刻みつけておくように」
とおっしゃった。私は感動して、あふれそうになる涙を呑みこむのが精一杯であった。
式のあと、私は何よりもまず今師の病室に駆けつけた。師は私の僧衣姿に掌を合わせて下さって、
「いいお姿になっておめでとう」
と祝福して下さった。それまで剃髪した私を見

た人はみんな、「可哀想に」とか「お気の毒に」とか言って泣いてくれるので、私は困っていた。そうか、これはやっぱりおめでたいことだったのだと、はじめて安心して、心が晴々とした。
今先生は手術後、奇跡的に体調が快復され、奥さまとヨーロッパ旅行などもされていた。
しかし一九七七年九月十九日に、癌の再発で、七十九歳で御遷化されてしまわれた。
「寺を持つな。死ぬまで小説を書け」
と教えてくれたが、私は師が最後まで、お心を寄せられ、中尊寺の貫首の立場で兼務住職になられ、その復興にお心を砕いていられた浄法寺の天台寺へ、思いがけない仏縁によって晋山することになり、二十年京都から通いつづけ、どうにか復興することができた。
思いもかけなかった成行だったが、師がこのままではもったいないと始終口にされていた天台寺の荒廃を一まず立ち直らせることが出来たのは、ひとえに御本尊桂泉観世音と、今春聴師の御加護によるものだと信じている。
昨年はきよ夫人も今師のお側に旅立ってしまわれたが、お二人が久しぶりで再会されている光景を思い描くだけでも心があたたまる。
「ひとりを慎め」という教えだけが、直接師からいただいた仏教の教訓だった。
その一言の重みと有難さを全身全霊に刻みつけ、私はまだこの濁世に生きつづけている。

（せとうちじゃくちょう　天台寺名誉住職）



比叡山麓滋賀院門跡にて

『維摩経』と「浄土建設」
――梵文テキストに照らして

西野　翠

ベルギーの大仏教学者E・ラモット博士は『維摩経』(*Vimalakīrtinirdeśa*) を「大乗仏教経典の至宝である」と賞賛しています。確かに、『維摩経』はドラマ仕立てで躍動感あふれ、ユーモアに富んでおり、コンパクトであってしかも「大乗仏教の百科事典」といえる内容を有する特異な経典といえます。

このラモット博士には『維摩経』のフランス語訳がありますが、その冒頭に付されたIntroductionは非常に詳細な「維摩経序論」となっています。その第4章「『維摩経』の資料の来源」では、『維摩経』が概念や理念を引いていると思われる経文を原始経典（Tripiṭaka）、律蔵（Vinaya）、蔵外経典、大乗経典のそれぞれから探り出し、その結果、「『維摩経』は最古層の「般若経」、「大宝積経」（第六会「不動如来会」、その旧訳が「阿閦仏国経」）、「華厳経」、「大集経」と密接な関連があり、それら経典と思想的に同一系譜を辿る」との判断を示しています。

同博士が指摘している「阿閦仏国経」と「小品般若経」の成立年代について、わが国でも赤沼智善『仏教経典史論』や静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』を筆頭に、平川彰『初期大乗仏教の研究 1』など精細な研究が残されています。これらの先行研究を頼りに「阿閦仏国経」と「小品般若経」の成立の先後関係、並びにこれら二経と『維摩経』との関係を確認してみますと、①「道行般若経」が成立した当時、一方では「阿閦仏国経」も成立していた、②「阿閦仏国経」を制作した人々と後に「小品般若」を作った人々は思想的に系譜を同じくした人々であろう、そして、③『維摩経』もまたこの系譜に連なるもので、阿閦仏の信仰を知る者によって制作された、といったことが推測されます。

つまり、これら三つの経典の間に、「阿閦仏国経」→「小品般若」→『維摩経』という思想的な流れが想定され、それは「維摩の故郷は阿閦仏国（妙喜世界）である」という「経中の事実」とも一致します。このような経典成立史的視点から見て、『維摩経』は、最古の浄土経典と目される「阿閦仏国経」の中核にある「慈悲」を母として、「般若経」の説く「空・不二」を父として生まれたといえましょう。

この経典の主人公は、古代インドの一大商業都市ヴァイシャーリーに住むリッチャヴィ族のヴィマラキールティ（vimalakīrti＝汚れないことで高名なもの）として知られる在家者であり、たいへんな資産家です。しかし、それは巧みな方便としての見せかけの姿であり、実際には阿閦（不動）如来の統治する妙喜世界から衆生救済のために穢土にやって来た大菩薩なのです。在家者の姿をとり、しかも病ある身で登場する大菩薩維摩は慈悲の権化であり、その維摩が語る教えはことごとく「不二の法」であります。

そして、『維摩経』の説く主要テーマは「不二思想を基盤とした真の菩薩行」であり、「不二」は「智慧」、「菩薩行」は「慈悲」を表わしますから、『維摩経』はまさに「智慧と慈悲の経典」といえます。

「菩薩行」は即ち「菩薩浄土の行」であり、「衆生の幸福のために如何に清浄な国土を建設するか」という菩薩の実践活動です。これについては、経典冒頭の「仏国品第一」（羅什訳）において、世尊によって懇切丁寧に説明されており、その主旨は以下の如くです。

①「衆生の類、是れ菩薩の仏土なり。」

②「菩薩の仏国を取ることは皆諸の衆生を饒益せんが為の故なり。譬えば人有りて空地に於て宮室を造立せんと欲するに、意に随て無碍なるも、もし虚空に於てすれば終に成ずること能わざるが如し。」

③十七種浄土の因（浄土建設の資材：「直心は是れ菩薩の

浄土」以下十七項目）

④浄土建設の十二階梯（「菩薩、其の直心に随うとき、則ち能く発行し」以下十二項目）

⑤十二項目の結語「其の心浄きに随いて則ち仏土浄し。」

以上の如く、①②で総論、③④で各論、⑤で結語として語られた「浄土の行」を、『維摩経』のサンスクリット（梵文）テキスト（２００１年12月、大正大学綜合佛教研究所のチームによる発見が報じられた）に照らしてみますと、いくつかの新たな意味が炙り出されてきます。ここでは、②の「空地造立宮室」の喩えと、⑤の古来人口に膾炙してきた一文「随其心浄則仏土浄」について触れてみたいと思います。

②の譬えの一節の梵文テキストを日本語に訳すと、以下のようになります。

「虚空を建立することを願い、そのように［願い通りに］建立しようとしても、虚空は建立することはできないし飾ることもできない。大徳ウパーリよ、一切衆生の心はそれ（＝汚されたことのないこと）を本性とするのです。大徳ウパーリよ、分別することが汚れであり、分別のないことが本性です。顚倒が汚れであり、顚倒のないことが本性です。我を立てることが汚れであり、無我が本性です。」（参照：前出『梵文維摩經』、30ページ）

ここまで、「浄土建設」に関する世尊の説法のうち、「空地造立宮室」と「随其心浄則仏土浄」について、梵文テキストに照らして見てみました。ところで『維摩経』では、「所縁（*adhyālambana*：対象を捉えること）が病の根本であり、病を断じるには所縁を離れよ」（「問疾品第五」）と説いています。そのような主張を掲げる『維摩経』が、形を持ち所縁となり得る「宮室」の如き仏国土の建設を勧めるのは奇妙に思われます。また、不二を説く『維摩経』が「心浄ければ」という条件を挙げてくるのも理に適わないのではないでしょうか。

「仏国品第一」で、世尊が大地を足の指でとんと突かれるやいなや、宝で飾られた三千大千世界

次に、⑤の「其の心の浄きに随って則ち仏土浄し」についてですが、従来、「其の心浄ければ」と「心浄」が「仏土浄」の条件のように理解されてきました。しかし、この部分を梵文テキストで読みますと、「yādṛś〜, tādṛś...」（〜があるように、そのように…）の構文が用いられています。実は、十二階梯のうち、七番目の「国土清浄」までは「yāvat〜, tāvat...」（〜である限り、その限り…）の構文が使われていて、先後の二項目の間に因果関係が存在し、「（努力して）〜すれば、…となる」と読めます。しかし、努力の結果として「国土清浄」というゴールが達成されれば、その後の展開は「国土が清浄であるように、そのように…となる」と、「自ずと顕われてくる世界」が描出されています。したがって、「心浄」と「仏土浄」の間に因果関係はなく、「其の心の浄きに随って」というのは「其の心の浄きままに」と解することができます。また、この「心の浄さ」については、「弟子品第三」におけるウパーリに対する維摩の言葉から明らかです。「大徳ウパーリよ、一切衆生の心はそれ（＝

が出現しました。そのように、この穢土そのものが既にして荘厳された仏国土であり、本来、新たな建設の必要はないのです。同様に、衆生の心ももとより清浄であって、浄化する必要はないと経典は説いています。さりながら、現実の人間は建てられた「家」に住み、具体的な環境のなかで暮らし、自分を取り巻くあらゆるものに二項対立的に反応し、対象を捉えて執着し、誰の心もどろどろとした汚泥の如くであり、みなみな「病む者」となっています。

『維摩経』は、その病める衆生に対して決して即効薬を与えてはくれません。反対に、自ら現実の諸々の問題のなかに分け入ってその解決に精進努力せよと力説し、しかも精進していることそれ自体を忘失するようなあり方を指し示しています。仏国土建設に取り組む菩薩―それは暗黒の世に光を投じようと努力する現代の私たちそのもの―に対して、建設材料や手順を懇切丁寧に教え、しかも「仏国土は建てられない」と言い放つところに、『維摩経』の真骨頂が示されていると思います。

以上のように、『維摩経』においては「浄土建設」といっても、「仏土は常に清浄なものとして既に存在する」のであり、私たちは常に仏土に抱かれているのです。現在する浄土が見えないのは衆生の病の故であり、維摩は「人はみな病める者である」と教えんがためにこそ、病者となって床に伏しているのです。私たち現代に生きる者は、「病者の自覚」をもって、維摩が教える「病の根本」を断じ、「建てられない仏土の建立」に心を寄せるべきではないでしょうか。

（にしのみどり　大正大学綜合佛教研究所研究生）

陸奥教区布教師養成所研修会においての講演。

五台山・中国への旅

――中尊寺檀徒総代・世話人研修旅行――

千葉和夫

一、仏教伝来の道「雲崗石窟」

六月二十七日早朝、北京から夜汽車に揺られて終着大同駅に着いた。佐々木仁秀執事長を顧問に、千葉明総代長を団長とする総勢十六名、六月二十六日から五泊六日の旅である。中尊寺を開山した慈覚大師が修業した五台山への参詣旅行を企画して数年、漸く実現した。今回が初めての海外旅行という人もあり、感動と緊張の出発だ。

ここ大同市は、北京より西方約五百キロ・人口三百万を擁する。三九八年北魏王朝の都として築城され、郊外には中国屈指の石仏で名高い雲崗石窟がある。

雲崗石窟に向うバスの車窓から外を眺めると近くの平地にも遠くの山にも緑がなく、川がない。ここは乾燥地帯なのだ。三百万人の生活用水はどうなっているかと質すと、今は炭鉱開発の影響で地下水は汚染が進み、生活用水は、はるか遠くの北京から給水され、北京は黄河から取水しているとのことだ。中国の一断面が見える。

バスが雲崗石窟に近づくと石窟のある武周山が見える。十年ほど前にシルクロードの旅で見た莫高窟のある鳴沙山によく似ている。入口にあたる正面の建築物も莫高窟と同じ雰囲気だ。

雲崗石窟に入ると巨大な石仏が微笑みをもって私たちを迎えてくれた。石窟を代表する第二十窟の大仏だ。石窟は四六〇年から開削され、四九四年北魏が洛陽に遷都するまでの約三十年間で大部分が完成したと言われている。特に十六窟から二十窟は高僧曇曜が全身全霊をもって築きあげた「曇曜五窟」は雲崗石窟のシンボルだ。

多くの石仏がおだやかで親しみやすい。日本で

見る仏像と変りなく、東洋的な姿である。四年前にガンダーラ美術に接する機会があったが、そこにあるのは西洋人の顔をした仏像であった。特にも肋骨があらわになった「痩せ衰えたシャカ像」に見るリアリティは今も強烈な印象となって残っている。ガンダーラから約三百年前後の年数を経て、雲崗石窟で美しい仏教美術が開花した姿をまのあたりにした感動は大きい。雲崗石窟から約百年、仏教は日本に伝来する。雲崗と中尊寺が連なって見える。

北魏は鮮卑族と言われたモンゴル系の少数民族である。圧倒的多数の漢民族との融合をはかる必要があった。当時の最も最先端の文化である仏教をとり入れて両民族の心のよりどころにしようとしたと思われる。巨大な石仏は皇帝の権威であり、皇帝そのものであった。

二、聖地「五台山」へ

六月二十七日午後、大同市から五台山へバスは五時間ほど南下した。黄土高原に入ると道路の両

側に乾燥に強いポプラ並木が続いている。平地にうっすらと草が生え、家畜が放牧されているのが時折り見える。水の流れは一向に見えない。

しかし、五台山に近づくにつれ次第に緑が濃くなってきた。五台山景観地区に入ると豊かな森林が現れ、景観は一変する。五台山を形成する三千メートル級の山々が雲の流れをせき止めて年間降水量千二百ミリにも及ぶ恵みの雨となる。乾燥のひどい黄土地帯にあって五台山はオアシスのような存在なのだ。いにしえの人々が、雨の神である龍が棲んでいたと考えるのも不思議ではない。人々は五台山の山々を九匹の龍にたとえた。

標高二千五百メートル近くになると森林限界状況が現れる。車窓から色鮮やかな山野が見え、山頂周辺は台地状の豊かな草原地帯である。起伏の少ない女性的な穏やかな高原に太陽の光が降り注いでいる。青空のもと放牧された牛や馬がゆっくりゆっくり草を食べている姿はのどかであり、心が洗われる。約千二百年前、長い厳しい旅路の末たどり着いた五台山に、慈覚大師も感極まったに違いない。

三、慈覚大師を偲ぶ

六月二十八日、今日もまた空が抜けるように青い。今日の最初の行動は慈覚大師が修業した竹林寺に始まる。竹林寺は唐の時代に建立された五重塔（舎利塔）が残っていたものの、かなり荒れた寺だったようだ。十年ほど前、故千田孝信前貫首が舎利塔前に坐して読経したという。今回は幸い管理の僧侶がいて、舎利塔を開扉していただく幸運に恵まれた。私たちも千田前貫首にならって経をささげ、遠く慈覚大師への思いをはせた。

午後は菩薩頂、顕通寺、塔院寺、殊像院と進む。菩薩頂は山の中腹にあり、五台山の全景がほぼ見える。向かいの山には千数百段の階段があるラマ教寺院がある。三方、四方山に囲まれた盆地状の平地は長い間に雪解け水などで作られた河岸段丘のようだ。穏やかな山並、下方の涸れた川は、昔なら豊かな水が流れていたかもしれない。壮大なこの景観はまさに絶景である。

顕通寺は当地最高の古刹である。ここに中国仏教会の事務局があり、日本の仏教界特に天台宗との交流が深いようだ。私たちは事務局長の接待をいただき、その折五台山が世界文化遺産に内定したことを知らされた。記念すべき一瞬であった。

中国の仏教徒はラマ教を含めて一五〇万人と推定されるとのガイドの話だが、実数はわからない。ともかくここは全ての宗派の事務局である。最近は入門希望者も多く、五台山に仏教学校をつくり、僧侶の育成と再教育に努めているようだ。

五台山では文殊菩薩への信仰が厚い。どの寺院にも菩薩像があり、特に殊像院の菩薩像はきわだっている。満州出身の清の皇帝は、満州と文殊の当地での発音が類似していることから文殊菩薩への信仰をはかったとのことだが、真偽のほどは定かでない。五台山は文殊菩薩の恵みによって水が湧き出したと信じられているように菩薩への信仰は厚い。五台山には年間三百万人の参拝者があり、寺院再建には海外からも多額の寄付があるようだ。五台山は東アジア最高の仏教聖地であることを実感した。

今回の旅で残念なのは、五つの山頂（台頂）のうち一箇所にも登れなかったことだ。五台山景区の再開発で立ち退きを強いられた住民が補償問題で政府と激しく対立し、駐車場や観光道路を封鎖する強行手段をとる場面があった。五台山は自然遺産に匹敵する景観地区である。台頂で山野草に手を触れ、零下四十度を超す寒さのもと、台頂寺院で越冬修業する厳しさに思いを寄せたかった。

四、終わりに

六月二十九日、五台山から太原を経て北京へ。途中寄った台外の仏光寺。独特の木組みの屋根、唐代の塑像や明代の五百羅漢が深く印象に残る。三十日は故宮や万里の長城（八達嶺）を中心とする北京観光である。

中国には何度か来ているが、いつも変化の大きさに驚く。今回黄土地帯を走っていると、ポプラ並木の造成や大規模な森林再生に取り組んでいるようすが見えた。北京はオリンピックを経て一変した。近代都市に変貌した街並には昔のおもかげは全くない。変化の激しさの中でおこる矛盾が旅人の目にも時折り映る。同時に文化基盤を共有する中国との交流の大事さを知った。

今回の研修旅行で、インドに発祥した仏教がガンダーラ、敦煌、そして雲崗・五台山とシルクロードにのって東方に展開し、関山中尊寺へと続く一本の糸が見えた気がする。

日本には西方からいろいろな文化が渡来したが、島国の日本はそれぞれの文化を終着点として受け入れ、独自の発展をさせてきた。仏教もしかりで、日本の北端の東北岩手は終着点のまた終着点。そんな意味で平泉は特色ある仏教文化の東方の終着点なのだ。平泉は五台山、雲崗に劣らぬ文化遺産の価値があると確信した。

（ちばかずお　中尊寺檀徒総代）

「爾時の人」

菅原光中

前貫首千田孝信大僧正は中尊寺晋山にあたってのお気持を、平成五年栃木県連合教育会発行の下野教育誌に寄稿されております。

「わたしの父は岩手県江刺郡田原村の出身でした。小学校一年生のとき、日光の観音寺に弟子入りして、いわゆる味噌すり坊主から修行しました。暮六つを撞く夕暮どきには古里恋しさに何度も泣いたそうです。――このたび、はからずも中尊寺一山からの推挙を受けて貫首に就任することとなりました。――東北は亡き父の故郷。都からのいわれなき蔑視に耐え、黙々として辺地の開拓に励んできた東北の庶民が、また、亡き父がわたしを呼んでいるような気がしてきました。偶然にも、今年は亡き父の五十回忌に相当していました。」と浅からぬ因縁が、半世紀を経た今、ご尊父様への感懐を深める不思議な巡り会いを述べておられます。そして「藤原百年の栄華を開いた清衡公の中尊寺草創の志は、戦乱に散った無辜の魂の鎮魂と東北庶民の福祉の祈願にあったといわれています。――啄木の愛した北上川への郷愁、賢治が展開した宇宙的な荘厳な捨身の世界、敦厚な人情と汚染されていない美しい山河。『未知の奥』東北への新しい旅立ちです。」と旅立ちの筆を認められました。

芭蕉にも通じる心境を在山中、折にふれ語っておられました。その年、ＮＨＫ大河ドラマ「炎立つ」が江刺市藤原の郷をロケ地として放映されましたが、殊にも千田貫首は藤原清衡公の父、経清公の悲惨な最期に心を痛められて、後に公の祥月命日である九月十七日、仏果菩提のために「恭しく惟れば 藤原経清公は 俵藤太 藤原秀郷が一門 の系譜に連なり 陸奥守源頼義に従して亘理権大夫散位を 号す前九年の合戦起こるや 公私背反の果て 敢然として身を安倍一族方に投じ白符を掲げて 官軍源氏が勢に抗し 厨川で奮戦の末 遂に斬首の刑に服せり 誠なるかな 経清公 無比の献身あってこそ――」と「白符忌」法要を営み、霊を悼らわれました。

経清公を平泉藤原氏の始祖として崇め、公の墳墓と伝える五位塚（江刺区岩谷堂）に同日、早朝欠かすことなく詣でたのであります。

千田大僧正の和顔愛語には、お孫さんが〝みんなにあえてよかったね〟のひと言に感動して慈を説き、タバコを喫う女子生徒を哀れんで〝先生も止めるからもう喫わない約束をしよう〟と同事にして悲の心を与える等々、絶妙にして目頭を沾すものがありました。

いよいよ退山の日も定まり、十三年の日々を偲ばれて平泉の人々へ遺した多くの言葉の一つに「平泉の遺産は大切です。平泉に住んでいる皆さんが、しっかりと護り、後世に伝えて下さい」と語られる熱い思いは、目に見えない信の世界に導かんとする眼差しを感じる一言でした。まさに生涯「爾時」を以って渡られ、釈尊が入涅槃の時、弟子達に最後の言葉を施した情景を彷彿とさせるものでもありました。

金色霊廟に念佛を称えるありし日の大僧正のお姿を拝して。

※編集注

「爾時」について「寺報関山第五号」に故千田孝信前貫首が説かれております。

「白符忌」の朝、五位塚（江刺区岩谷堂）にて

紙芝居で平泉のメッセージを世界へ発信

（岩手県県南広域振興局経営企画部　主事　女鹿智恵）

平泉の世界遺産登録は、最終目標ではありません。世界遺産登録の実現が平泉の貴重な文化遺産の保全を強力に後押しすること、地域の人々が改めて地域に誇りを持つこと、そして、この誇りが景観、伝統・文化の保護に結びつくことが目指すところだと考えます。そのためにも、世界遺産登録を契機とした地域づくりにおいては、子供達が楽しく参加できるようにし、次世代への継承を実践していくことが、地域の発展につながるものと考えます。

岩手県県南広域振興局では、「平泉」の文化的価値について、子どもたちに分かりやすく伝えようと、平成二十年六月に、紙芝居「みんな　なかよし　ひらいずみ」を職員が手作りしました。紙芝居の主人公は「きよひらくん」。戦乱で家族を失い、悲しみと孤独を経験した「きよひらくん」が、みんななかよしの「平泉」を築いていく物語です。「平泉」では、敵も味方も関係なく、みんななかよく暮らしています。動植物への感謝の気持ちを「きよひらくん」の「いただきます」の言葉で表し、自然との共生のメッセージを盛り込みました。紙芝居上演のために訪問した幼稚園や保育園、公民館等は七十ヶ所以上、紙芝居を聴いた園児等は延べ人数五千人以上となっています。紙芝居を観た一関市大東町の興田保育園の園児は、「お兄さんやお姉さんが来てくれてうれしい。平泉のことがよく分かった」と話してくれました。

地域の宝「平泉」を海外の人たちへも楽しく伝えたいと思い、紙芝居の英語版を作成しました。海外からのお客様に上演し、魅力を伝えています。上演を機に、他国の世界遺産に係る取り組みについて聴くことができ、充実した交流となりました。また、英語版の紙芝居を縮小した絵本は、ユネスコ日本政府代表部の近藤誠一前特命全権大使が、世界遺産登録に向けた委員国への働きかけに活用し、「貴重な戦力」だったとお話しくださいました。

紙芝居の上演を重ねる中で、子ども達に分かりやすく説明しようと工夫することは、大人にも分かりやすく親しみやすい内容になること、子供と同席する先生方や保護者の方と共通のテーマについて学ぶこととなり、「世代間交流」に繋がるということに気がつきました。

そして、この紙芝居の活動は、地元の中学生を含めた産学官連携の取り組みへと発展しました。中尊寺貫首の山田俊和師から県南広域振興局に、縦横一メートルほどの大きな東山和紙が寄贈されました。東山和紙は、藤原清衡公も写経に使ったという、丈夫で質の良い伝統の和紙です。絵付けの手法について、岩手大学名誉教授の種倉紀昭氏の指導を受け、絵付けは、平泉中学校の生徒たちが行いました。絵付け後、紙芝居は、平泉町内の「こがさか楓林堂」様が裏打ちしてくださり、完成しました。お披露目の読み聞かせは、子育てボランティア「かみふうせん」の阿部ひとみさん、大内治さんが朗読し、平泉中学校の阿部李紗世さんが上演のお手伝いをしてくれました。阿部李紗世さんは「自分たちが携わった大型紙芝居が披露できて嬉しい。紙芝居を通して人々の心に何かを伝えることができれば」と話してくれました。このように、皆の心が一つになって東山和紙の紙芝居を完成させ、平泉のメッセージを発信することへと繋がりました。この大型紙芝居は、東山和紙の産地、一関市東山町の山谷公民館でも披露されました。会場にはお年寄りや小学生など約五十人が集まり、平泉文化と東山和紙の歴史について学びました。また、「東山和紙」の生産技術を受け継ごうと、平成二十二年一月には、東山和紙づくり短期実習（県南広域振興局主催）が実施され、技術を身に付けて次世代の若者に伝えていこうと意欲を見せる五名が受講して、「東山和紙」復興への大きなステップとなりました。

これからも、地域の子供たちに地域の宝をしっかりと継承できるように、また、清衡公の平和のメッセージを世界に発信し、人々が互いに認め合い「なかよく」暮らせる世の中の実現への一助になれるように、紙芝居の取り組みを大切にしていきたいと思っています。

風信 / 語録

（郵便受けから）

中尊寺を見学し、すごいと思ったことがありました。讃衡蔵の中に金で書かれたお経があったことです。清衡公が願ったように平和な世界をつくっていきたいです。

岩手県平泉町立平泉小学校３年
小野寺　桜　歩

私は、金色堂がすごいなあと思いました。見たことがなかったので、その色と作りに感動しました。中尊寺のことを詳しく知ることができました。ありがとうございました。

岩手県奥州市立衣里小学校６年
常　盤　　碧

金色堂や讃衡蔵で、お寺の歴史や、様々な人物の活躍などを説明していただき、とっても勉強になりました。中尊寺のハスの花の歴史のことも教えていただき、とても感動しました。

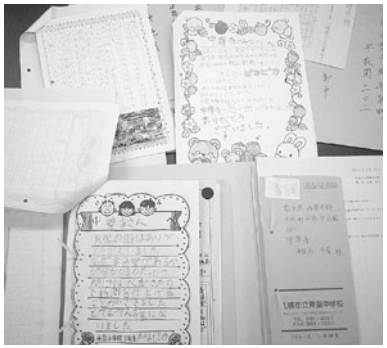
岩手県田野畑村立田野畑小学校６年
菊　地　沙　綾

金色堂は金色でピカピカですごかったです。他にも色々な建物や中尊寺経などを見学して、とても勉強になりました。中尊寺で沢山の思い出を作ることができました。ありがとうございました。

岩手県陸前高田市立広田小学校６年
村　上　紗　英

坐禅の指導をしていただき、ありがとうございました。ほんの短い時間でしたが、坐禅体験は、想像以上に大変でした。それでも、耳を澄ませて周りの音を聞くことができ、旅行で高ぶった気持ちを落ち着けることができたように思います。また、坐禅を終えてからは、気持ちがすっきりとし、達成感がありました。

北海道札幌市立青葉中学校３年
伊　藤　早　紀



〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

「活動報告」

幹事　佐々木　禎　子

平成二十一年度は、ご在任中ご詠歌活動を応援して下さいました千田孝信前貫首が、四月十一日に八十三歳でご逝去なさいました。五月十四日、鉢石山観音寺にての本葬に、支部より生花をお供え致しました。当日は、外のテントの屋根が一部めくれ上がったり、一部の供花が倒れたりするほど風の強い日で、会からの供花の無事を願いました。

五月十九日中尊寺での告別式には、会員三十名参列し、心を込めて千田前貫首にご詠歌を奉詠致しました。

七月九日、十日の二日間にわたり陸奥本部舞踊研修会が中尊寺にて行われ、多数の会員が参加致しました。当日地方（かた）として詠唱（えいしょう）に協力して下さった会員の方々に感謝申し上げます。十一月十一日、十二日には陸奥本部詠唱研修会と検定試験がホテル武蔵坊にて行われました。地元での検定会ということもあり、若い会員の方も熱心に参加し、検定には全員合格致しました。御指導いただいた先生方には、心より感謝申し上げます。

十二月には会員最年長の佐々木マレ様（九十七歳）がご逝去なさいました。長年の活動に感謝申し上げます。昨年は、前貫首を始めとして会員の身内の不幸が多く、新年会は中止とさせて頂きました。次年度は、良い事が続きますよう、ご祈念申し上げます。

合掌

文化財だより

重文　中尊寺経蔵・金色堂旧覆堂の保存修理完了

平成十九年度より三カ年継続事業で「中尊寺経蔵」「金色堂旧覆堂」の二棟に対し、国庫補助による保存修理が行われた。この二棟の修理の発端は、折しも気象庁が二十年ぶりの大雪として発表した「平成十八年豪雪」で、経蔵、旧覆堂ともに軒や向拝の木部に雨水が浸入し、木部の腐食や雨漏りが発見されたことによる。また旧覆堂は基壇の石敷きが動いたり、破損した部分も相当に見られるようになっていた。

修理は平成十九年度三月に着手し、二十年度は経蔵の銅板屋根葺替、二十一年度は旧覆堂の銅板屋根葺替と基壇石敷の改修が行われ、平成二十一年十一月にすべての事業が無事完了した。

〔寺報グラビア〕（三頁）参照。

金銀字経、還蔵される

平成二十一年四月に紺紙金銀字交書一切経のうち「廣弘明集巻第十九」一巻が中尊寺に還ってきた。金銀字経は国宝指定のものが十五巻中尊寺に伝存するが、これとは別に近年になって寺に還蔵された未指定の金銀字経はこれで十二巻となる。

経典名　廣弘明集巻第十九
表　紙　宝相華唐草文　見返絵
　　樹下説法図（二菩薩
　　二比丘　二天女　飛行
　　楽器　散華　香台）
本　紙　縦二六・四cm　全長六八五・三cm　紙数一三
紙　界高二〇・〇cm
界幅一・八cm

〔寺報グラビア〕（三頁）参照。

岩間氏寄贈資料のうち『歌帖』

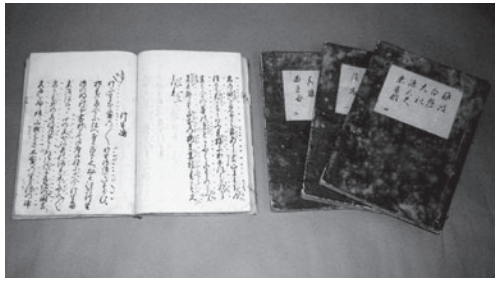
讃衡蔵新収蔵資料

岩間氏寄贈資料

平成二十年八月に平泉町在住の岩間智子氏より聖教、書画等十五点が中寺寺に恵贈された。資料の制作年代は平安～近代までと幅広い。また、岩間氏に対し二十一年八月二十四日の大施餓鬼会の際に感謝状が贈呈された。

秋吉氏寄贈能楽資料

平成二十一年十月に横浜市在住の秋吉千代氏より、喜多流謡古本八十一冊をはじめ鼓の教則本六冊、小鼓一挺が中尊寺に恵贈された。秋吉氏は同年夏に天台宗東京教区の団参で中尊寺を参拝された折、古来寺僧によって継承されている神事能の紹介を受けたことを機縁として、寄贈をお申し出になられた。いずれも江戸～大正時代刊行の貴重な能楽資料である。



寛永版『吾妻鏡』　全二十五冊

平成二十一年二月、寛永三年開版の版本『吾妻鏡』が新蔵となった。今回新蔵された版本は寛永慶安期の京都の書肆杉田勘兵衛による後印本である。本版は江戸時代を通じて最も普及した版で和訓がほどこされている点が第一の特徴である。平泉の歴史を伝える文献資料としての価値はいうまでもなく、中世の訓読を類推する研究資料としても貴重である。

寛永版『吾妻鏡』

新刊紹介

（二〇〇九年一月～十二月）

『平泉藤原氏』　工藤雅樹　無明舎出版　二〇〇九・六

東北古代の原風景と文化、律令から安倍・清原時代を経て、辺境とされた地に政権が樹立されるまでのドラマを新しい視点で読解。

『骨寺の時代』　佐藤光男　内藤印刷　二〇〇九・六

かつて骨寺村と呼ばれた一関市本寺地区に生まれ育った著者が、郷土に伝わる「平泉野」「骨寺」伝承の謎と意味に思いをはせた力作。

『奥羽から中世をみる』　藤木久志・伊藤喜良編　吉川弘文館　二〇〇九・七

平泉藤原氏政権の本質を追究する工藤雅樹氏、入間田宣夫氏の二論文のほか、中世の奥羽地域に広く視点をあてた十五論文を収録する小林清治氏追悼論文集。

『〔別冊〕私たちの世界遺産　ユネスコ憲章と平泉・中尊寺供養願文』　五十嵐敬喜・佐藤弘弥　公人の友社　二〇〇九・七

平泉の現地取材と願文研究の成果を踏まえて、平泉の顕著な普遍的価値の源泉は「中尊寺供養願文」にあると論じる。

『近世から昭和まで　みちのく平泉を歩いた文化人たち』　岩渕国雄　本の森　二〇〇九・八

平泉に足跡を残した文化人の中から、菅江真澄や山頭火、津田左右吉など計7人を取り上げ、平泉の人々の暮らしぶりや習俗、彼らが平泉をどう見て、どう感じたのかをわかりやすく解説。

『Discovering Chūson-ji Temple』　中尊寺仏教文化研究所編　中尊寺　二〇〇九・八

中尊寺発行のガイドブック『中尊寺を歩く』の英語版。一般向けのわかりやすい文章で、英語圏の方のみならず英語で平泉文化を紹介したい方にとっても最適な入門書。

『わが家の仏教・仏事としきたり　天台宗』　土屋慈恭監修　日東書院　二〇〇九・十

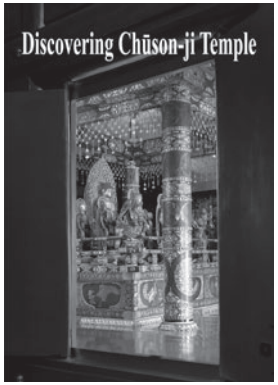
天台宗の歴史や教えから、日常のお勤めや冠婚葬祭の進め方にいたるまでわかりやすく解説した、天台宗を家の宗教として持つ人に好適な一冊。

『季刊東北学　第二十一号　特集　骨寺村に日本の原風景をさぐる』　東北芸術工科大学東北文化研究センター編　柏書房　二〇〇九・秋

中世には中尊寺経蔵別当領だった「骨寺村」（一関市本寺地区）のありようを古代から近世までを射程として、各分野の研究者が多角的な視点で解明。

『平泉　浄土をあらわす文化遺産の全容』　佐々木邦世編　川嶋印刷　二〇〇九・十一

研究者、文化人から地元住民と多彩な執筆陣による叙述集。それぞれの分野で平泉に親しんできた人々が平易な文章でその価値を語る。



〔関山句嚢〕

（平成二十一年六月二十九日　於毛越寺）

〈第四十八回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

（席　題）

興亡の老杉に涼賜わりぬ　（大会長賞）
＊宇多喜代子選　特選　奥州　及川　梅子

受付のこれより浄土あやめ咲く　（毛越寺貫主賞）
特選　奥州　熊谷　勅子

いちにちの介護とかれて菖蒲園　（中尊寺貫首賞）
特選　一関　菅原　良江

夏萩の板碑に垂るる月日かな
秀逸　宮城　佐藤　みね

梅雨晴間一塵もなき毛越寺
秀逸　奥州　佐々木美智子

三百種三千株の花菖蒲
秀逸　一関　石川ワカ子

名刹の池に添ひたる花あやめ
秀逸　平泉　旭　光

光堂裏に控へし青大将　（岩手県知事賞）
＊佐治英子選　特選　平泉　旭　光

遣水の夏の落葉を掃いてをり　（河北新報社賞）
特選　盛岡　茂木　泉

丹の堂を満たす梵音涼しかり　（平泉観光協会長賞）
特選　大船渡　及川由美子

湧水に力いただく花菖蒲
秀逸　奥州　木村　文子

緑蔭を出でて遣水日を砕く
秀逸　花巻　安部　克詠

半眼のまなざし涼し仏達　（岩手県議会議長賞）
＊戸塚時不知選　特選　北上　山田　充子

みちのくの水に馴染みて古代蓮　（岩手日報社賞）
特選　奥州　菅野　好子

みほとけに離れて座り涼しかり　（中尊寺賞）
特選　北上　伊藤ふみ子

麦秋や日矢を浴びたる古戦場
秀逸　宮城　佐々木克狼駄

伽藍跡往時をさぐる夏帽子
秀逸　宮城　満吉　正久

義経堂崖の下なる行々子
秀逸　花巻　中村　陽子

夏霞金鶏山を遠くせり
秀逸　盛岡　清水　芳子

旅人の句帳は白し花あやめ　（平泉町教育長賞）
＊工藤節朗選　特選　奥州　及川　秀士

花あやめ神籤を結ぶ車椅子　（岩手日日新聞社賞）
特選　一関　小野寺束子

動かざること山のごと蟇（ひきがえる）　（毛越寺賞）
特選　盛岡　菅崎磨もる

あやめ咲く浄土の風の匂ひけり
秀逸　奥州　小野寺昭次

毛越寺の夢はむらさき花菖蒲
秀逸　奥州　及川　忠子

あめんぼう栄華の影を揺らしけり
秀逸　一関　小野寺宙外

金鶏山一人舞台のほととぎす
秀逸　奥州　小野田キヨ

社殿へと一枝を渡す青楓　（平泉文化会議所理事長賞）
＊小林輝子選　特選　北上　菅原　典子

高館や瑠璃金剛の額の花　（岩手日報社賞）
特選　奥州　鈴木　利和

みほとけに離れて座り涼しかり　（岩手日日新聞社賞）
特選　北上　伊藤ふみ子

首桶も仏も涼し讃衡蔵
秀逸　奥州　鈴木　利和

今朝もまた寺のターシャや草を引き
秀逸　平泉　佐々木邦世

夏蝶のつがひ散華のごときかな
秀逸　一関　鈴木道紫葉

青邨の声ともさやぐ今年竹
秀逸　奥州　佐藤　瑞穂

遣水へ影を正しく花あやめ
秀逸　北上　畠山えつ子

みちのくの水に馴染みて古代蓮（平泉観光協会長賞）
＊小菅　白藤選　特選　奥　州　菅野　好子

水すまし磨く浄土の水鏡（河北新報社賞）
特選　奥　州　梅森　サタ

言ひ寄ればなほ離れゆく蛍かな（岩手日日新聞社賞）
特選　平　泉　関宮　治良

芭蕉句碑羽子もつ蟻の光けり
秀逸　花　巻　及川　秀士

無量光院跡夏蝶のつきまとふ
秀逸　花　巻　関　園子

能楽堂金の毛虫の罷り出づ
秀逸　一　関　伊藤　静枝

稲造の横文字の句碑蝉の殻
秀逸　宮　城　佐々木克狼駄

夏萩や童子のごとく束ねたり
秀逸　花　巻　中村　青路

（兼　題）

雪嶺の余光はるかに田草取る
＊宇多喜代子選（天）山　形　柴田　汀石

鍬洗ふ掌にやはらかき春の水
（地）奥　州　千田　コト

漆黒の幹より生るる桜かな
（人）遠　野　浅沼　藍子

断髪の昭和一桁みどりの日
＊小原啄葉選（天）一　関　知　華

霾るや征きし同胞風となり
（地）花　巻　高橋　悦子

燭おぼろ馬の化身のおしら神
（人）遠　野　菊池　草庵

中尊寺へ毛越寺へと涅槃西風
＊佐治英子選（天）奥　州　服部　常子

牛に藁投げ足す八十八夜寒
（地）遠　野　菊池　草庵

声ふとき王者の山の青葉木菟
（人）盛　岡　菅崎磨もる

延年の舞を見てゐる白日傘
＊戸塚時不知選（天）花　巻　中村　青路

にはとりの大きく鳴けり花りんご
（地）北　上　伊藤ふみ子

初蝶に遣水の宙ありにけり
（人）奥　州　服部　常子

初蝶に遣水の宙ありにけり
＊工藤節朗選（天）奥　州　服部　常子

高館の風に乗りたる初つばめ
（地）宮　城　佐藤　みね

あやめ祭金鶏山に鳶一つ
（人）盛　岡　利府ふさ子

ひと間合ひおいて花散る奥の坊
＊小林輝子選（天）一　関　小山　尚宏

水口を切れば動きぬ花筏
（地）一　関　小野寺　亨

水飲んで帰る夏帯山頭火
（人）平　泉　佐々木邦世

鉈彫りの観音朴の花匂ふ
＊小菅白藤選（天）平　泉　佐々木邦世

代掻きの水引き藤原祭来る
（地）花　巻　市野川　隆

春愁や竹人形に角かくし
（人）茨　城　町井　寂石

児童生徒

平泉小学校

桜散る転校した子目にうかぶ
特選　六年　菅原　彩佳

麦の穂がゆらゆらゆれておどってる
特選　五年　下河原命子

たんぽぽのわた毛旅立つどこまでも
特選　六年　千田　茜

雨のあと空のはしっこにじのはし
秀逸　四年　小野寺菜摘

金色堂麦のほゆれて美しい
秀逸　五年　阿部　祐大

さくらんぼ二つならんで笑ってる
秀逸　五年　佐藤　潤

夏空に形いろいろ浮かぶ雲
秀逸　五年　佐藤　亜美

雨あがりにじ色の橋あざやかに
秀逸　六年　齋藤　実理

長島小学校

夏きたと今日もお日さまいばってる
特選　五年　鈴木　快

たんぽぽがそっと顔出すすきまから
特選　六年　千葉　真璃

夏の夜くっきりうかぶ大文字
特選　四年　佐々木夏央

ひまわりが弟みたいににっこりと
秀逸　六年　千葉　雅世

へびいちごまっかに光りおいしそう
秀逸　三年　阿部　廉

かぶとむしはやくかおだせつちのなか
秀逸　一年　千葉　幸治

ほたるがね田んぼでほわわきれいだな
秀逸　五年　千葉　純

ミニトマトきいろかあかかたのしみだ
秀逸　二年　三浦奈保子

平泉中学校

平安と変わらぬ色のあやめかな
特選　三年　小野寺敦美

ひまわりが揺れるにつれて雲がいく
特選　三年　小松崎裕己

ほたる来て窓辺にとまる芸術家
特選　一年　小野寺美勇士

鳴き声はセミの命があふれてる
秀逸　二年　小野寺　陸

花火咲く淡く照らすはつないだ手
秀逸　二年　菅原　月

梅雨過ぎて草木輝く平泉
秀逸　二年　石川　勝巳

たん念と香りつまった新茶かな
秀逸　三年　千葉安紗実

あじさいが首下げ空とともに泣く
秀逸　三年　千葉　美貴

〔関山歌籠〕

〈第三十回西行祭短歌大会入選歌〉　（平成二十一年四月二十九日）

＊伊藤一彦選

うつつにも雪降り出でぬ老い母が満州語る老人ホームに
（中尊寺貫首賞）
角田　朝長スミエ

じゃん拳に負けた直後の顔をして電車を送るいち人のあり
（平泉町長賞）
山田　仲田　良

ほのぐらき外灯ともる道に待つ五万羽のとり積みゆく車
（平泉観光協会長賞）
一戸　初森　テル

鷺脚に螺鈿が光るテーブルは向ふ人なく薄明かり帯ぶ
（岩手日報社賞）
盛　岡　向井田郁子

ぶつぶつと呪文のような泡を吹き蟹は盪（おうな）に買われて行きぬ
（ＩＢＣ岩手放送賞）
北　上　遠藤タカ子

母らしき人の押し来し車椅子の学生と共に授業受けゐつ
（岩手日日新聞社賞）
栗　原　小野寺正年

佳作

われの背にパンチを一つづつ呉（く）れて将棋の下手な子らのさよなら
花　巻　三浦　公朗

亡き夫がテレビに見入るをからかいし吾いま欠かさず見る「水戸黄門」
奥　州　菅原　ツエ

雪に圧され曲りし杉の苗なれば傾きを北に向けて植ゑをり
横　手　浦部　昭二

早番におとめは行きし積雪の庭に轍（わだち）の青く残れり
奥　州　五嶋　恵子

先頭の児は幾たびも歩をゆるめ振りむく四月の集団登校
奥　州　菅原　幸子

「カボチャ」の語に眼大きく開きたりカンボジアよりの留学生は
一　関　鈴木　幸子

柔らかく雪あかり揺れ人集ふここはかつて練兵場の跡
盛　岡　須藤　秀子

折々に通はす風に嫁ぎたる子らの匂ひのうするる部屋か
盛　岡　遠藤　吉光

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部　中尊寺関係

平成二十年十一月十七日～平成二十一年十一月十六日

□ **平成二十年**

十二月三日
人権啓発公開講座　於宗務庁
法泉院法嗣　三浦章興出席

平成二十一年

三月十日～十一日
福聚教会詠唱研修会　於中尊寺
山内寺庭婦人 九名参加

三月二十四日　午後一時三十分
陸奥教区布教師養成所研修会　於毛越寺
「維摩経の今日的意義」
講師　西野　翠　師
山内より二十二名参加（寺婦含）

三月二十四日　午後二時四十五分
陸奥教区人権啓発研修会　於毛越寺
「ハンセン病に学ぶ」
講師　市川　祐純　師
山内より十九名参加（寺婦含）

六月二日～三日
教区並びに東北・北海道地区協布教師会総会研修会
山内より二名参加　於作並一之坊

八月二十六日～二十九日
教師安居会　於居士林
積善院副住職　佐々木律秀出席

十月六日
一隅を照らす運動東日本大会　於郡山市
（ユラックス熱海）
山内より四名（檀信徒会長含む）参加

十月二十四日
天台宗一斉托鉢　於中尊寺
集まった浄財六八、九八〇円は地球救援募金へ

十一月二日
陸奥教区法要　於奥福寺
御開帳護摩供法要　山内より四名参加

□ **役職任免**（平成二十一年二月二十日）

寺院教会収入額教区審議会委員任命
金剛院　破石澄元
（同年三月四日）

寺院教会収入額中央審議会委員任命
大長寿院　菅原光中
（同年三月四日）

寺院教会収入額中央審議会議長任命
大長寿院　菅原光中
（同年七月一日）

寺院教会収入額中告基準審議会委員任命
大長寿院　菅原光中

□ **住職任命**（平成二十一年一月二十七日）

大徳院住職　菅原光聴
（同年二月十三日）

寶性院兼務住職　清水広元
（同年十月七日）

千養寺住職　佐々木秀厚

□ **教師補任**（平成二十年十二月十一日）

権律師　観音院法嗣　清水秀法
（平成二十一年三月二十八日）

僧都　積善院副住職　佐々木律秀
（同年十月二十三日）

僧都　円教院　千葉快俊

□ **経歴行階履修**

（平成二十一年九月五日）
四度加行履修　常住院法嗣　佐々木亮王
（平成二十一年十月二十六日）
円頓大戒履修　観音院法嗣　清水秀法

□ **遷　化**（平成二十一年四月十一日）

中尊寺前貫首　千田孝信　（八十五才）
（平成二十一年九月九日）

大徳院法嗣　佐々木顕延　（二十四才）
（平成二十一年十月二十二日）

願成就院住職　三浦高信　（七十七才）

御神事能番組　五月四日

古実式三番

開口　三浦　章興
祝詞　千葉　快俊　（大鼓 破石　晋照　小鼓 佐々木律秀　笛 佐々木五大　後見 菅野　宏紹）
若女　菅野　澄円
老女　菅原　光聴

能
竹生島　（天女 佐々木五大　ツレ 佐々木律秀　シテ 佐々木邦世　ワキ 菅野　成寛　ツレ 菅原　光聴　太鼓 菅野　宏紹　大鼓 千葉　快俊　小鼓 佐々木仁秀　笛 清水　広元　間 破石　晋照）

五月五日

古実式三番

開口　三浦　章興　（笛 佐々木五大　後見 佐々木律秀）

狂言
口真似　（主 菅野　裕康　太郎冠者 千葉　遵　客 佐々木　亮）

能
田村　（シテ 佐々木五大　ワキ 佐々木秀厚　ツレ 三浦　章興　ツレ 佐々木律秀　大鼓 佐々木長生　小鼓 菅原　光聴　笛 菅野　澄円　間 破石　澄元）

秋の藤原まつり　**中尊寺能**　十一月三日

喜多流仕舞
経　佐々木文子
天鼓　小川みどり
松虫　佐藤　佳子
高野物狂　青木みさを

狂言
萩大名　（大名 破石　澄元　茶屋太郎冠者 菅野　澄円　破石　晋照）

能
猩々　（シテ 佐々木五大　ワキ 佐々木秀厚　太鼓 三浦　章興　大鼓 佐々木長生　小鼓 佐々木仁秀　笛 清水　広元）

執務日誌抄

平成二十年十二月一日～二十一年十一月三十日

平成二十年

◇十二月

一　日　月次（つきなみ）大般若（本堂）

七　日　薬師会（讃衡蔵）

十　日　平泉町景観形成審議会（執事長　於保健C）

十二日　貫首、講話（一関市教育委員会主催学校運営推進協議会　於サンルート一関）

十四日　弥陀会（本堂）

十六日　叡山仏青様団参（貫首挨拶・五大案内）

十七日　白山会（本堂）

中尊寺節分会総会並びに節分会打合せ

十九日　JTBカルチャーサロン講話（講師邦世「歴史の事実と真実」於新宿センタービル）

二十日　骨寺村荘園米奉納（経蔵）

二十一日　お経を読む会（真珠院後住澄円）

二十四日　文殊会（経蔵）

二十八日　恒例御供餅つき

三十一日　午後三時　**一山総礼**

平成二十一年

◇一月

一　日　○時　**新年祈祷護摩供修行**

七時　東山町〈若水送り〉着

九時半　正月祈祷護摩（本堂）

十時半　総礼

修正会　釈迦供（本堂）

堂籠り（～五日　結衆、開山堂）

二　日　九時半　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　薬師供（峯薬師、讃衡蔵）

三　日　十四時　謡初め（広間）

九時半　正月祈祷護摩（本堂）

修正会　山王供（山王堂）

十一時　元三会　慈恵供（本堂）

四　日　修正会　薬師供（瑠璃光院薬師堂）

五　日　修正会　文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）

梵焼供（結衆勤、開山堂）

寒修行（行者七名、小寒～節分）

六　日　修正会　釈迦供・月山供（釈迦堂）

七　日　修正会　白山十一面供（本堂）

大般若会（本堂）

修正会　弥陀供（金色堂）

八　日　修正会　薬師供（旧闕伽堂薬師、讃衡蔵）一字金輪仏・千手観音法楽

修正会結願

十三時半　恒例**「金盃披き」**

十四日　**慈覚会**（御影供　本堂）

元貫首多田厚隆師十七回忌（本堂）

十五日　**「特別展　平泉～みちのくの浄土～」開眼法要・開会式**（円乗院・管財光聴　於福岡市博物館　会期十六日～二月二十二日）

十八日　お経を読む会（貫首）

二十五日　**文化財防火訓練**

二十九日　平泉町世界遺産地域協議会（執事長　於役場）

三十日　平泉観光協会理事会（執事長　於平泉レスト）

◇二月

一　日　月次大般若（本堂）

二　日　貫首、講話（（社）岩手県宅地建物取引協会北上支部　於Hニューヴェールアネックス）

三　日　恒例**大節分会**（関取高見盛招く。歳男歳女七十二名、町内園児）

六　日　酒田市教育委員会様来山（中尊寺ハス株分けの件　執事長・管財章興）

十三日　駐日エジプト特命全権大使ワリード・アブデルナーセル氏一行様来山（貫首挨拶・総務広元案内）

十四日　涅槃会御逮夜（本堂）

十五日　**涅槃会**（本堂）

お経を読む会（円教院）

二十一日　国際専門家会議一行様来山（貫首・執事長・参務邦世・管財光聴）

二十二日　菊まつり協賛会主催菊作り講習会（管財章興　大広間）

二十六日　平泉世界遺産推進基金運営委員会（執事長　於役場）

◇三月

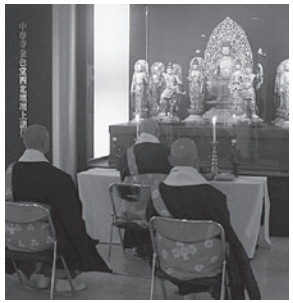
一　日　月次大般若（本堂）

二　日　茨城教区様団参（成寛案内）

五　日　立正佼成会七十一周年記念式典（貫首　於盛岡教会）

九　日　平泉観光協会理事会（執事長　於観光協会）

十三日　**「特別展　平泉～みちのくの浄土～」開眼法要・開会式**（貫首・執事長・大長寿院・円乗院・金剛院・管財光聴　於世田谷美術館　会期十四日～四月十九日）



職員AED講習会（広間）

十六日　**春期一山会議**（大広間）

十九日　**基衡公御月忌**（胎曼供　本堂）

お経を読む会（積善院後住律秀）

二十日　春彼岸会法要（法華三昧　本堂）

金色院檀信徒総代会（執事長・金色院執事・法務）

総代・世話人会総会（執事長・法務　於平泉レスト）

二十三日　平泉町景観形成審議会（執事長　於役場）

開山会（護摩供　開山堂）

二十四日　「平泉古事の森育成協議会」（仮称）設立総会（管財章興　於

役場）

三十日　浄土宗知恩院様団参（執事長挨拶）

◇**四月**

一　日　月次大般若（本堂）
中尊寺新事務局発足
金色堂旧覆堂保存修理工事始まる（～八月三十一日）

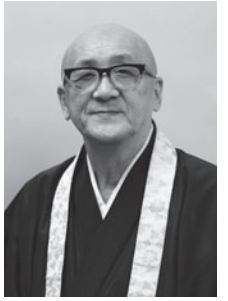
二　日　東京教区様来山（十月団参下見　執事長・宗務所長他　本堂・広間）

三　日　平泉観光協会理事会（執事長　於観光協会）

七　日　福島県国見町様来山（中尊寺ハス株分け　管財章興）

八　日　仏生会（本堂）
お経を読む会（金剛院後住晋照）

十一日　**前貫首千田孝信大僧正遷化**



十二日　常陸太田市下利員町会様来山（執事長挨拶・管財光聴）

十三日　散華心院大僧正孝信大和尚儀通夜（地蔵院・大長寿院　於日光観音寺）

十四日　散華心院大僧正孝信大和尚儀密葬（地蔵院・大長寿院　於日光観音寺）
天台宗陸奥教区寺庭婦人会岩手支部総会（執事長代理法務康純　於毛越寺）
散華心院大僧正孝信大和尚儀回向（一山・寺婦・行全・総代世話人・職員　本堂）

十六日　書道家鈴木春朝師・額奉納式
中尊寺菊まつり総会（総務広元挨拶・管財章興　大広間）

十八日　陸奥教区寺庭婦人会総会・研修会（所長・執事長　大広間）
一山会議・協議会（広間）

二十二日　文化庁三谷卓也氏他来山（世界遺産構成資産視察）

弁慶力餅競技保存会総会（執事長）

二十三日　桜友会清掃奉仕（管財章興　於北坂）

二十四日　真言宗豊山派金蔵院様団参（貫首案内）
讃衡蔵テーマ展〝「平泉」伝承の諸仏〟閉幕（讃衡蔵）

二十六日　恒例花まつり

二十九日　第三十回**西行祭短歌大会**（講師伊藤一彦氏「西行と牧水」）

◇**五月**

一　日　**春の藤原まつり**開幕
藤原四代公追善法要、稚児行列
郷土芸能奉演（一関　市野々神楽）
開山護摩供（開山堂）

二　日　郷土芸能奉演（達谷窟毘沙門神楽／江刺　行山流角懸鹿踊）

三　日　源義経公東下り行列（義経公役　俳優五十嵐隼士）
郷土芸能奉演（衣川　川西剣舞）

四　日　古実式三番
神事能「竹生島」
郷土芸能奉演（朴ノ木沢念仏剣舞／胆沢　行山流都鳥鹿踊）
神輿渡御（友和会）

五　日　開口・狂言「口真似」
神事能「田村」

六　日　山王供（山王堂）

十四日　散華心院大僧正孝信大和尚葬儀（貫首・地蔵院・真珠院・大長寿院・円乗院・随行・他一山・総代　於日光観音寺）

十七日　お経を読む会（円乗院後住五大）

十九日　前貫首千田孝信大僧正告別式（本堂）

二十一日　中尊寺杯ゲートボール大会（執事長挨拶　於町ゲートボール場）
仙台市博館長佐藤憲一氏・NHKプラネット社長井深久男氏
来山（貫首・執事長　応接）

二十二日　NHK仙台放送局長浅谷友一郎氏来山（貫首・執事長　広間）
平泉観光協会理事会（執事長　於観光協会）

二十四日　天台寺檀信徒様来山（真珠院・総務広元　応接）

二十六日　桐生仏教会青年部様団参（宏紹案内）

二十七日　須賀川市妙林寺訪問（金色堂標柱受取　管財澄元・章興）
駐日ナイジェリア連邦共和国大使館ゴッドウィン・ンスデ・アボ大使一行様来山（貫首案内）

二十八日　平泉観光推進実行委員会総会（総務広元　於役場）

三十日　三千院御懺法講（貫首　於京都）

◇**六月**

一　日　月次大般若（本堂）

三　日　エジプト大使館訪問（貫首）

四　日　伝教会（御影供　本堂）

七　日　陸奥教区第一部檀信徒会様団参
ふるさと平泉会第十七回総会並びに懇親会（執事長　於浅草ビューH）

八　日　立正佼成会様来山（総務　応接）

十　日　貫首、嵐山光三郎氏と対談（テレビ岩手）

十一日　貫首、講話（東北地区救護施設研究協議大会　於花巻温泉紅葉館）

十二日　貫首、講話（西和賀町高齢者大学開講式四百名　於西和賀農村環境改善センター）

十三日　喜桜会連合会発表会（～十四日、於能舞台）
四寺廻廊法要（貫首・執事長・総務広元・法務康純・総務澄円　於毛越寺）
瑞巌寺様団参
立石寺様団参

十四日　**法華経一日頓写経会**（本堂）
お経を読む会（貫首）

十六日　九州四十九院薬師堂霊場会様

団参（宗務所長挨拶・総務広元案内）
二十日　自在房蓮光忌法要（本堂）
二十三日　ウェーサカ式典（晋照・総代世話人　於長島東松寺）
二十五日　浄土宗和歌山印南来迎寺様団参
二十六日　中尊寺総代世話人研修旅行（～七月一日、執事長・法務宏紹・総代世話人　於中国五台山）
二十八日　貫首、講話（北上川ＲＣＡ定期総会・特別講演　於ベリーノＨ）

◇七月

一　日　月次大般若（本堂）
五　日　茨城教区第五部普賢院様団参（回向　導師積善院・出仕法務・秀厚）
十二日　**如法写経十種供養会**（頓写法華経奉納式）
　　お経を読む会（貫首）
十七日　**清衡公御月忌**（胎曼供　本堂）
十八日　貫首、講話（立正佼成会江戸川支部盂蘭盆会　於東京）
十九日　**平泉総社神輿渡御**

前貫首千田孝信大僧正百箇日忌（本堂）
二十二日　浄土宗岩手教区寺庭婦人会様団参（宏紹案内）
二十五日　貫首、講話（歴史・文化講座参与光中同行　於多門院伊澤家）
　　貫首、講話（五郎沼・古代蓮まつり　参与秀圓同行　於紫波町日詰）

◇八月

一　日　月次大般若（本堂）
四　日　十五時半〈**平和の鐘**〉打鐘
七　日　**夏安居**（～十一日、結衆、開山堂）
八　日　米国臨時代理大使ジェームズ・Ｐ・ズムワルト御夫妻・在札幌米国総領事ダーナ・ウェルトン氏・文化交流専門官多賀谷正貴氏来山（参与邦世案内）
十四日　貫首、野村萬斎師と対談（テレビ岩手）
　　第三十三回**中尊寺新能**
　　能「箙」（佐々木多門師）
　　狂言「樋の酒」（野村万作師）

能「杜若」（中村邦生師）
十五日　ユネスコ「寺子屋運動」（募金活動・平和の鐘打鐘）
十六日　第四十五回**平泉大文字まつり**
十八日　「平泉」世界遺産登録現地視察・文化庁文化財部長他来山（山内視察　管財澄元案内）
十九日　文化庁世界遺産室長来山
二十三日　施餓鬼会御逮夜（本堂）
二十四日　**大施餓鬼会・放生会**（本堂）
　　お経を読む会（貫首）

◇九月

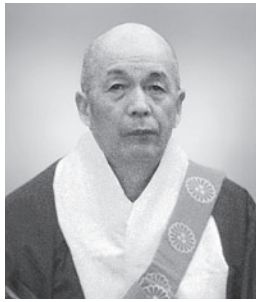
一　日　月次大般若（本堂）
　　先中尊寺貫首今春聴師遺墨展（～三十日、本堂上段ノ間）

三　日　**泰衡公御月忌**（金曼供　本堂）
　　浄土宗増上寺縁山会様団参（貫首挨拶）
四　日　要津院様来山（秀厚案内）
十　日　貫首、Ｃ・Ｗ・ニコル氏と対談（テレビ岩手）
十一日　先中尊寺貫首今春聴師三十三回忌法要（本堂）
十七日　般若寺講中様団参
　　白符忌（本堂）
十九日　赤堂稲荷例祭（護摩供）
　　故今貫首三十三回忌法要（宗務所長・副所長　於寛永寺）
二十三日　秋彼岸会法要（本堂）
　　お経を読む会（利生院）
二十五日　貫首、法話（社）岩手県女性部会連絡協議会様　本堂）

◇十月

一　日　月次大般若（本堂）
　　兵庫教区普門寺様団参（貫首挨拶・快俊案内）
二　日　慈眼会（本堂）

六　日　貫首、法話（立正佼成会様　本堂）
八　日　千田前貫首納骨式（本堂）
十四日　石川県白山神社様団参（管財澄元案内）
十五日　真言宗豊山派東京教区様団参（貫首挨拶・章興案内）
十六日　東京教区第四部様団参（貫首法話　本堂）
十八日　お経を読む会（地蔵院）
十九日　北総教区来迎寺様団参
二十日　菊まつり開闢法要
二十一日　東京教区第六部様団参（貫首法話　本堂）
二十二日　山内願成就院住職三浦高信大和尚遷化



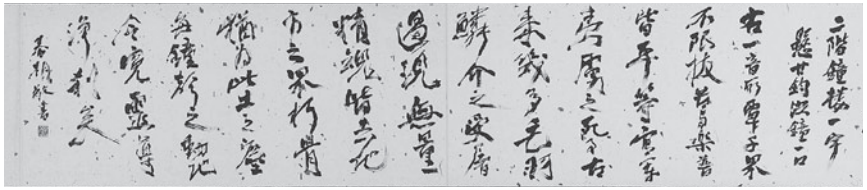
江戸川区立正佼成会様来山（貫首挨拶）
　　東京教区第三部様団参（貫首法話　本堂）
　　インド大使ヘーマント・クリシャン・シン駐日インド大使一行様来山（貫首挨拶・参与邦世案内）

二十三日　東京教区第五部様団参（貫首法話　本堂）
二十六日　願成就院高信師葬儀（本堂）
二十八日　**秀衡公御月忌**（金曼供　本堂）

二十九日　東京教区第七部様団参（貫首法話　本堂）
三十日　東京教区第一部様団参（貫首法話　本堂）

◇十一月

一　日　秋の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要、稚児行列
郷土芸能奉演（胆沢　行山流都鳥鹿踊／江刺　行山流角懸鹿踊）
二　日　菊供養会（本堂）
お経を読む会（貫首）
郷土芸能奉演（一関　市野々神楽）
三　日　中尊寺能「猩々」、狂言「萩大名」、謡・仕舞（一関・平泉喜桜会奉納　能舞台）
郷土芸能奉演（達谷窟毘沙門神楽／衣川　川西念佛剣舞）
駐日クロアチア特命全権大使ドラゴ・シュタンブルク氏一行様来山（貫首　茶室）
四　日　一乗院様団参（貫首挨拶）
五　日　貫首、講話（於岩手県立県南青少年の家）
六　日　東京教区第八部様団参（貫首、法話　本堂）
九　日　神奈川教区薬王山塩谷寺様
十三名団参（執事長案内）
十一日　東京教区第二部様団参（貫首法話　本堂）
信越教区円融寺様団参（広元案内）
浄土宗廣隆寺様団参（成寛案内）
林芳輝氏来山（「小交響詩平泉の詩」贈呈　総務　応接）
十二日　貫首、講話（一関地区保護司会様　於日武蔵坊）
十五日　菊まつり表彰式（大広間）
二十三日　天台会御逮夜（結衆勤　本堂）
二十四日　**天台会**（御影供　本堂）
三十日　経蔵・旧覆堂保存修理完了
（平成十九年度より三ヶ年継続事業）



『中尊寺建立供養願文』鈴木春朝師奉納

御奉納者　御芳名

一　『中尊寺建立供養願文』書写額　一幅
東京都　鈴木春朝様

一　聖教・書画　十五点
平泉町　岩間智子様

一　能楽資料（謡本・小鼓）
横浜市　秋吉千代様

浄財御奉納者　御芳名

平成二十年十二月～平成二十一年十一月

小沢理香様　六万五千四百十円
平泉観光写真社様　五十万円
大聖院　多田孝文様　二十万円
立正佼成会盛岡教会　花巻教会様　五万円
海鋒　守様　三万円
山田泰枝様　六万円
㈱鶴屋百貨店様　十万円
千葉　明様　五万円
埼玉教区法儀研究会様　三万円
鈴木春朝様　二十万円
金蔵院様　三万円
織本会様　三万円
杉谷義純様　三万円
天台寺様　十万円
天台宗新成会様　三万円
佐藤芙蓉（和堂会）様　五万円
かしの木建設㈱様　三万円
伊藤大鑑（正法寺山主）様　三万円
松緑神道大和山様　五万円
園融寺　阿　純孝様　五万円
観音寺　千田孝明様　三十三万円
常住寺　薗　実丞様　十万円
北上　歓喜院様　三万円
大本山　増上寺　緑山会様　三万円
㈳岩手県法人会連合会女性部連絡協議会様　六万円

松緑神道大和山　岩手県連合会様　五万円
普門寺様　三万円
新宗連奥羽総支部様　三十万円
㈱ジェイティービー様　三万円
そば上人良運和尚法類会様　十万円
天台宗東京教区様　三十万円
来迎寺様　五万円
渡辺敏一様　三万円
立正佼成会江戸川教会様　八万円
寛永寺様　三万円
喜久謡会様　三万円
木村智広様　五万円
深大寺様　三万円
秋吉千代様　五万円
立正佼成会盛岡教会様　三万円
神奈川教区　塩谷寺様　三万円
信越教区　圓融寺様　五万円
（順不同）

浄財募金

スマトラ沖地震緊急募金　八万三千二百円
サモア地震津波緊急募金　八万三千二百円
㈶日本ユニセフ協会へ

赤堂稲荷鳥居建立寄進奉納者　御芳名

平成二十一年一月～十月

平泉町　岩渕定美様　一基

不動尊篤信御奉納者　御芳名

平成二十年十二月～平成二十一年十一月

富良野市　南砂利工業様　三万五千円
野村農園様　季毎御供物
小樽市　村口初男様　季毎御供物
平川市　笠原不動院代表　小笠原喜世様　四十万七千七百円　御供物献酒

弘前市　笹　隆治・哲子様　季毎御供物
青森県南部町　工銀青果　工藤一男様　季毎御供物
秋田市　木村英夫様　五万二千円
大仙市　ベル美容室　高橋紀美世様　季毎御供物
大館市　加賀谷正子様　季毎御供物
二戸市　㈲岩食商事　米沢　励様　季毎御供物
盛岡市　野口芳子様　三万九千円
釜石市　㈲水戸鈑金工業　水戸松男様　三万五千円
北上市　㈱和賀開発　菊地栄喜様　四万円
奥州市　佐々木　久様　三万円
千田善鋼材様　三万円
一関市　割烹ろばた一八　渋谷正幸様　三万三千円
かわさきファミリークリニック様　三万円
㈱東北鉄興社様　三万円
山平様　三万円
㈱精茶百年本舗　清水恒輝様　衡年茶千四万円五百個
㈲豊隆軌道　千葉幸八様　四万五千円献酒
一関信用金庫平泉支店様　七万円
平泉町　㈲千葉製材所　千葉芳美様　三万円
平泉町　㈲ケーテック　芦萱敬一様　十一万五千円
仙台市　池田恵美子様　一万四千円季毎御供物
小島ヒデ子様　季毎御供物
渡辺琢也様　三万五千円
栗原市　㈲金成工務店様　三万円
大崎市　日環エンジニアリング㈱　岸　久幸様　十万円
佐々木則雄様　三万円
佐々木　寛様　三万五千円
登米市　阿部武衛様　三万五千円
宮城県南三陸町　山口　昇様　三万円
福島市　笹山まり子様　季毎御供物二万円
佐々木英夫様　三万五千円
新潟市　松原晴樹様　季毎御供物一万円
水戸市　藤枝恵枝子様　季毎御供物
中野区　中村武司様　七万円
渋谷区　㈱ショウワンスポーツ様　三万円
市川市　土橋智夫様　三万円
藤沢市　矢舗雅子様　三万円
和泉市　辻林正博様　六万円

関山中尊寺　本堂
本尊　丈六釈迦如来坐像　新造について

――趣旨ならびに御協賛のお願い――

萬象萌え出づる好季　貴台にはいよいよ御清栄の段　お慶び申し上げます

陳者、

関山中尊寺は、遠く慈覚大師円仁を開山と仰ぎ、天台宗東北大本山として法燈を護持してまいりました。その信の拠ってたつところは、藤原清衡公が数奇な前半生を経て、平泉に府を開くべく、関山の山上に寺塔を造立するにあたって、最初に着手されたのが多宝塔であり、その御本尊は法華経を説かれる釈迦如来でした。

天治三年（一一二六）春、大伽藍落慶の場に読みあげられた「中尊寺供養願文」の草案は中尊寺第一の資料でありますが、その冒頭述べられているのは、やはり

「安置し奉る、丈六皆金色の釈迦尊像」

であります。

惜しむらくは、山上の堂塔も鎌倉時代の末には多く朽ち損じ、平泉諸寺衰退の状況がうかがわれます。

今に遺る三体の丈六仏、阿弥陀如来像は、元は山麓に在りました光勝院（閼伽堂）に奉安されていた像であり、明治四十二年、現在の中尊寺本堂を再建する際に、御本尊として迎えて安置した経緯があります。

一昨年、およそ五十年ぶりにその丈六阿弥陀像を本堂に還座致しました。その大いなる像容は、参詣の人々に深い感銘を与え、いま一度、本堂に丈六仏を奉安したいという思いが日に増して、ならば、中尊寺創建の本旨でもあり「抜苦与楽・普皆平等」を説く普遍的な礼拝仏・釈迦如来の御尊像を新たに造立したい。そうした、皆の切なる思いを実現致したく、この平成の大事業に着手致すこととしました。

世情は、仏性ある人間まさかの事柄が毎日のように報道されております。しかし、こうした不透明な時代だからこそ、「人中の尊」仏性を耕す機縁として、御助成の勧募を貴台にお願いし、もって勝縁を結ばれますよう勧進申し上げる次第であります。

敬白

平成二十二年　三月吉日

天台宗東北大本山　中　尊　寺

貫首　山田俊和

一山大衆

後記

▽　千田孝信前貫首は生前「私は死んだら水となり、北上川の滴になりたい」とおっしゃっていた。前貫首はご在任中、東北各地を巡り、人々に優しく語りかけられていた。そのお姿とお言葉は、すべてを包みこむような大きな慈愛にあふれており、我々聞くものは勇気付けられ、心に安らぎを覚えた。師はまさに、この東北の営みを支えてきた「北上川」のような方であった。

▽　前編集長の後を受け必死に編集作業をした。しかし作業中前編集長のご助言を幾度仰がせていただいたことであろうか。自分はまだまだ修行がたりない。　破石　晋照

▽　千田前貫首の突然の訃報に、中尊寺に勤める私ども職員みな声を失いました。山を去られる日のあのにこやかなお顔が今でも目に浮かんで参ります。ご在任中、いつもやさしいお声をかけていただき、楽しい思い出、感謝の気持ちでいっぱいでございます。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。　職員一同

関山閲覧用のウェブページを作成いたしました。バックナンバーを含め全号の閲覧が可能となりました。ぜひご利用ください。また、これからも書籍での関山の配送を希望される方は、ご遠慮なくお問い合わせください（http://www.chusonji.or.jp/）。

中尊寺〈寺報〉『関山』第十六号
平成二十二年（二〇一〇）三月十日
発行　中尊寺
（執事長　佐々木仁秀）
〒〇二九―四一九五
岩手県平泉町字衣関二〇二
編集　中尊寺仏教文化研究所
印刷　川嶋印刷㈱

〈発行　中尊寺〉